

初等中等教育における「広義の生徒指導」の現状と課題

—教員養成課程の学生を対象にした質問紙調査を通して—

胡 田 裕 教[†]

The Situation and Issues for Student Guidance and Counseling
in Elementary and Secondary Education: Concerning a Questionnaire
Survey of College Students Receiving Teacher Training

EBITA Hiroyuki

Abstract

In this study, we conducted a questionnaire survey focusing on the opinions based on retrospection of college students enrolled in teacher training courses concerning student guidance and counseling as it is conducted in elementary and secondary schools. With it we clarify the current situation and issues. The purpose was to consider how to improve the situation.

As a result, there are many descriptions of “thinking” in “student guidance and counseling”, whereas there are many descriptions of “considering” in “career guidance and counseling”, indicating a difference in the depth of reflection.

Therefore, it is considered necessary to rethink teaching methods conducted at present and to promote the relationship between functions, and consider changes in the school environment.

キーワード：初等中等教育，広義の生徒指導，想起，教員養成課程の学生

[†] 大阪産業大学 全学教育機構 教職教育センター 非常勤講師

草稿提出日 10月24日

最終原稿提出日 11月3日

Keywords: elementary, secondary education, student guidance and counseling, retrospection, teacher training

1. 問題の所在と目的

現在の日本の子どもたちは、その特徴としてSNSに代表されるようなネット社会に浸ることを好み、それらを介在した様々な問題が生じていることは周知の事実である。また、対面でのコミュニケーションを円滑にとることを苦手としていたり、将来の職業という観点からはその自立性等について問題があると言われたりすることもある。それらは日本の社会状況や経済状況の変化に起因しているとして個々人の状況とは関係なくひとまとめにして言い放たれる場合もある。学校を取り巻く環境が大きく変化してきている中、教育現場ではその対応にせまられている。そういった問題を包括的に捉えることができる中心的な教育活動として生徒指導や進路指導、キャリア教育などがその機能を発揮しうる。

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸張を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指すとともに、あらゆる場、あらゆる機会を通して自己指導能力の育成を目指し、自己選択や自己決定を通して自己実現を果たしていこうとする教育活動のことである。また、その機能について、学校の教育を達成する上でも重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義をもつもの(文部科学省, 2010)、とされている。つまり、学校教育の重要な領域の中に、学習指導と並んで生徒指導があり、これら二つの指導が両輪となって円滑な学校教育を行うことができることを示している(ここでいう「領域」とは、「機能か領域か」という二者比較で使用する場合の「領域」ではなく、一般的な「領域」のことをさす。以下同様)。また、その二つは独立しているのではなく相互に関係している。特に生徒指導は学校教育の中のさまざまな活動を通じて行われることが目指されている。また、進路指導とは、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験および相談を通じて、生徒みずから、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が組織的、継続的に援助する過程である(文部省, 1961)、とされている。特に、中等教育、つまり中学校と高等学校においてその機能を発揮する。さらに、キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育のことである(文部科学省, 2011)、とされていて、学ぶことや働くこと、そして生きることをつなぐものがキャリア教育であるとも言われている。

これらの三つの教育活動に共通していることは、教育課程内外を問わず学校の教育目標

を達成するための重要な機能であること。また、それぞれに生きる力を育むという観点から生き方に関わる指導であることといえる。本研究では、生徒指導を中心としたこれら三つの教育活動を限定して、「広義の生徒指導」と称して展開するものとする。

これらを背景として、本研究の目的は、学校を取り巻く環境が変化している中で、学校現場で行われている広義の生徒指導について、実際に行われている指導における特徴を考察することである。その際、初等中等教育段階で実際に指導を受けてきた経験のある教員養成課程に所属する大学生に対して想起に基づく調査を実施し、その現状と内在する課題を明らかにした上で、「広義の生徒指導」のあり方について考察していくことである。

大学生の初等中等教育段階の想起に関する先行研究として、山崎（2007）や小川（2009）などがある。これらは、高校生の進路選択の関する悩みに対して必要に応じて専門家のアドバイスが受けられるようにすることが重要であることを踏まえキャリア教育の導入とともにキャリア・カウンセリングの必要性とその意義について考察したものや、教員養成課程に属する学生に高校時代のキャリア教育の経験を尋ねたものであるのに対し、本研究は、生徒指導や進路指導、キャリア教育を生き方に関わる指導として包括的に捉え、「広義の生徒指導」の枠組みのもとに、教員養成課程に属する学生が初等中等教育段階でどのような広義の生徒指導を経験してきたと感じているのかについて考察するところにその特徴を有する。

2. 研究方法

研究方法としては、教員養成課程に所属する大学生が初等中等教育段階を振り返り想起した時、自分自身が教師から受けたどのような指導が記憶に残っているのか。あるいは、校内外で行われていたどのような指導が記憶に残っているのか。それらについて質問紙により調査し分析する。そこで得られた知見により現状と課題を示し、今後の「生き方に関わる指導」の可能性を検討する。具体的には、教育実習を既に終えた教員養成課程に所属する大学3年生101名（男子35名、女子66名）〔初等教育84名、中等教育17名〕を対象に質問紙（アンケート・自由記述）調査を実施した。調査内容は、「あなたの記憶に残る生徒指導・進路指導・キャリア教育の事例について書きなさい。」という問いに対して、①領域〔生徒指導・進路指導・キャリア教育〕、②校種〔小学校・中学校・高等学校〕、③関連する人物〔自分・同級生・教師・先輩・後輩・その他〕、④事例のタイトル記述、⑤記憶に残った理由等を含めた状況の自由記述、について選択または記述するものである。なお、①～③は選択項目である。⑤については、記憶に残る事例となぜその事例が記憶に残っているのかの理由等を記述する項目であり、④については、⑤で書いた事例について自分なりに

考えてタイトルをつける項目である。

質問紙から得られた想起に関するデータにおける本研究の背後にある環境的な特徴は、指導を行った行為者の感覚ではなく指導を受けた側の想起が対象となり被行為者としての認知や感情における程度の強さが示されるとともに、一定の時間（年月）が経過した上で振り返ることで現在の自己からみた当時の思いが重層的に意味付けされるところにある。具体的には、生徒指導・進路指導・キャリア教育の三つの領域での被指導経験から一つを選択しているところに認知等の程度の強さが示され、教育実習の経験を通して教師の立場も少しは理解している視点から自分の求める教師像を構築しつつ、冷静に当時を俯瞰した状態で考えることができる環境の中で得られたものであるといえる。これらの内容は、「時間的展望」概念の考え方に通じている。過去を回想したり、将来を展望したりすることを社会心理学者のレヴィンは「時間的展望」と呼んだ。つまり、過去が現在につながり、そして現在が未来につながっているという意識のことである。そして、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」と定義づけた(Lewin, K, 1951)。これは、認知的な側面を定義したものである。それを受けて、都筑(1999)は、「時間的展望」を構成する側面は認知的、感情・評価的、欲求・動機的の三つあり、どのような出来事を想起・予想するか、どのように思っているか、志向の強さの程度はどうかということをそれぞれ示し、「個人の心理的な過去・現在・未来の相互関連過程から生み出されてくる、将来目標・計画への欲求、将来目標・計画の構造、および、過去・現在・未来に対する感情」と定義している。よって、本研究は「時間的展望」概念を援用した実践を背景にした分析ということができる。

また、集計・分析に関しては、選択項目からなる調査①～③についてはデータ集計による定量的な結果を示し、④、⑤の自由記述についてはそれぞれテキストマイニングにより分析を行い、その結果を選択領域ごとに詳細に考察することにした。

なお、本質問紙調査は教員免許取得に必要な教職に関する科目の中の生徒指導、教育相談及び進路指導等（キャリア教育を含む）に関する科目の計15回の授業の初回に実施したものである。

3. 研究結果と考察

(1) アンケート集計結果（調査①～③）

教育実習を既に終えた教員養成課程に所属する大学3年生101名に質問紙（アンケート・自由記述）調査を実施した。「あなたの記憶に残る生徒指導・進路指導・キャリア教育の事例について書きなさい。」という問いに対する集計結果が表1である。まず、「①領

表1 記憶に残る「広義の生徒指導」についての領域別アンケート集計結果

項目	属性		領域			合計	
			「生徒指導」 (49件)	「進路指導」 (50件)	「キャリア教育」 (3件)		
校種	小学校		9	2	0	11	
	中学校		30	14	3	47	
	高等学校		13	37	0	50	
関連する人物	自分		34	43	3	80	
	同級生		30	5	2	37	
	教師	学級担任		21	42	1	64
		学年主任・学年所属		11	3	0	14
		生徒指導主任・担当		11	0	0	11
		進路指導主任・担当		1	7	0	8
		教科担当教師		2	3	0	5
		部活顧問		1	1	0	2
		学校全体の教師		1	1	0	2
		その他		3	0	0	3
	先輩		4	2	0	6	
	後輩		5	0	0	5	
	その他	クラス・学年生徒全体		6	3	0	9
		親・母親		0	4	0	4
職場体験先の人		0	0	3	3		
他校生徒		0	1	0	1		

※「領域」「校種」について複数の項目に○印をつけた学生がいたため合計が学生数と合致しない。

域」については、「進路指導」と「生徒指導」での記憶は併せて97.1%を占め、その二領域はそれぞれほぼ同じ割合であった。逆に「キャリア教育」の記憶はわずか2.9%であった。また、「②校種」については、「高校」と「中学校」での記憶が圧倒的に多く併せて89.8%、「小学校」は10.2%であった。次に、「③関連する人物」に関しては、「教師」と「自分」が非常に多く、「教師」の中でも「学級担任」が群を抜いて多いことがわかる。

(2) アンケート集計結果の考察

表1の結果から、まず、「領域」については、広義の生徒指導の記憶の中で、「進路指導」を選択した学生が多いことに関しては、大学受験という大きな節目の経験がその大きな要因になっていると考えられる。また、その内容については、自分自身と学級担任との二者での内容が中心になっている。「生徒指導」については、まず、生徒指導とはどのようなものかという認知が進路指導と同様に、ある程度形成されていることが選択者の多さ

に表れている。また、自分自身のことだけでなく同級生との関わりを含めた中での学級担任・生徒指導主任・学年主任などの教師との三者での内容が多くなっている。ここに学生の記憶に残る進路指導と生徒指導のそれぞれの指導の様相の違いに構造的な特徴が表れているのかもしれない。「キャリア教育」については、選択者がかなり少ないがこれは認知度も大きく影響しているのであろう。すべての事例が職場体験についての記述であったことより、それ以外の何をキャリア教育と称するのかが認知されていないことが挙げられる。また、「校種」については、「高等学校」と「中学校」が多い。これは、直近の経験として記憶に残りやすいためと思われる。「関連する人物」では、「教師」の中でも、「学級担任」との関わりを多くの学生が記憶していることより、「広義の生徒指導」においては、「学級担任」の役割の重要性が指摘できよう。学級担任は教科活動や特別活動をはじめとして、学級の子どもたちと多くの時間接している。また、日々の会話や個人面談（三者面談）等を通じて子どもたちを理解しようとしている。そういった物理的、心理・社会的側面から「自分を理解してくれる教師」として学級担任を特別な位置づけとしてみていることになる。

(3) テキストマイニングによる分析結果（調査④、⑤）

本分析では、テキストマイニングソフトKH coder (ver.2.0.0) を用いて、「④事例のタイトル」と「⑤記憶に残った事例の詳細記述」について書かれた内容について共起ネットワークコマンドを用いて分析した。「共起ネットワーク」とは、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークで、強い共起関係ほど太い線で描画できたり、出現数の多い語ほど大きい円で描画できる（樋口、2014）特徴をもつ。KH coderの共起ネットワークコマンドを用いて語と語のつながりや関連の程度を可視化したものが、「④タイトル記述」、「⑤『生徒指導』選択者の自由記述」、「⑤『進路指導』選択者の自由記述」で、それぞれ図1～図3である。

図1では、事例に対して名付けたタイトルの全員分を分析対象にしている。「生徒指導」、「進路指導」、「キャリア教育」の三つの領域が全体としてどのように関連した特徴をもっているのかを示した図である。「生徒指導」では、図中の（生徒指導）を中心にして、主にもその上部と左側に共起する語が見受けられる。上部では、（身だしなみ）、（チェック）、（厳しい）、（指導）など、左側では、（人生）、（一番）、（嫌）、（時間）などがそれぞれ共起する語として出現している。「進路指導」では、図中の（進路指導）に近接して、（大学）、（受験）があり、（進路）の周辺に、（先生）、（相談）、（考える）が共起する語として出現している。また、（先生）、（親身）、（考える）が「生徒指導」、「進路指導」の二つの領域を介在して

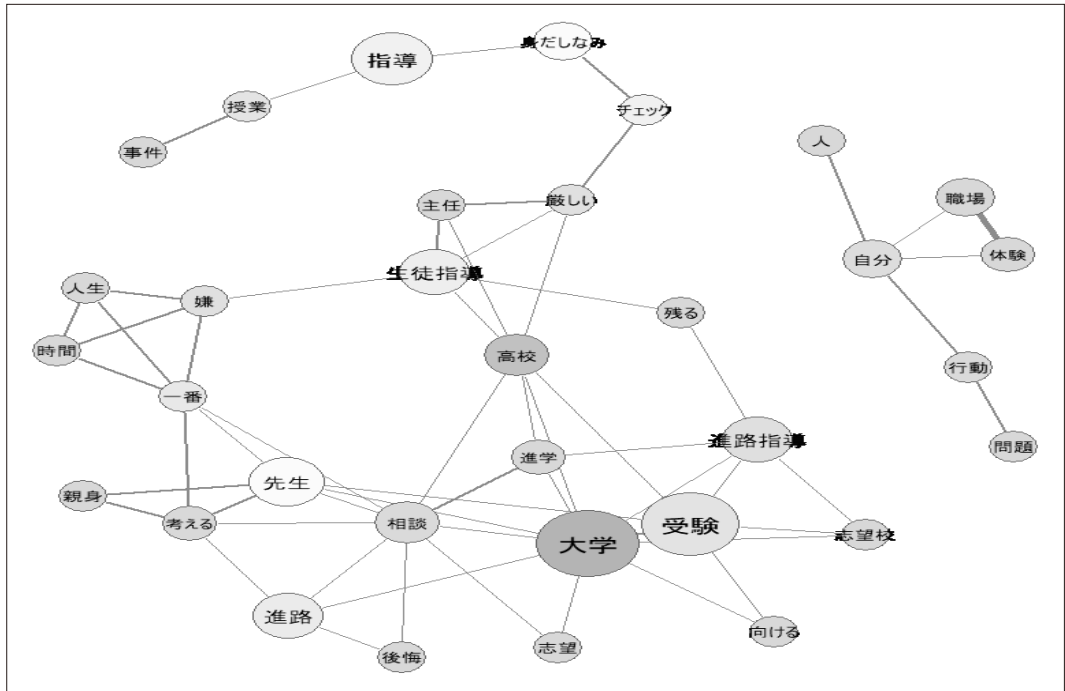


図1 「タイトル記述」における共起ネットワーク

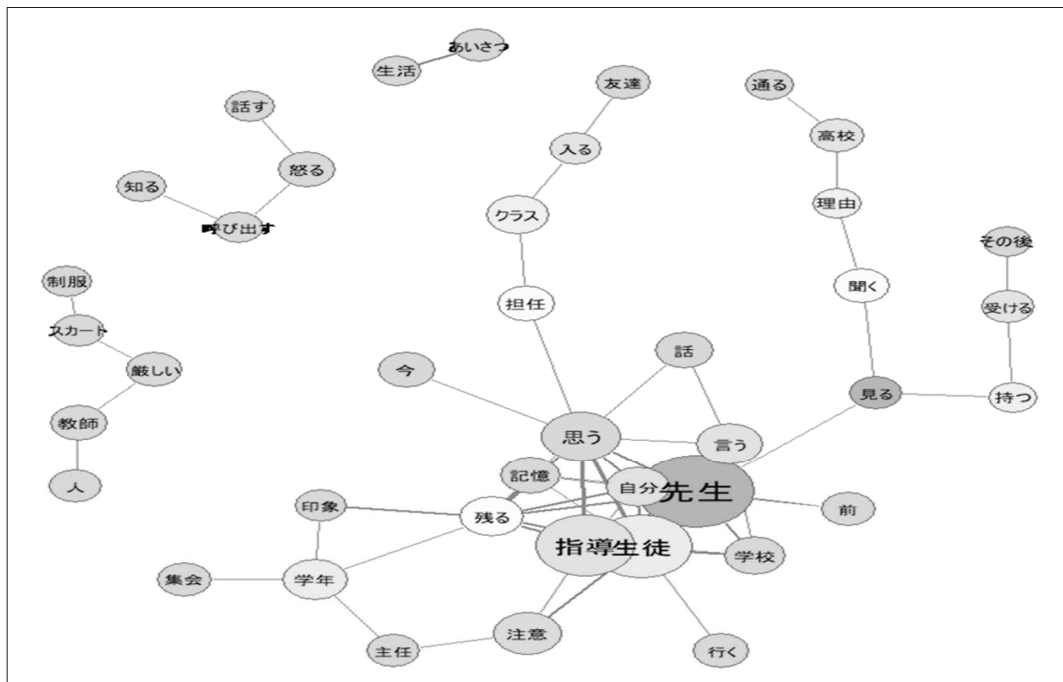


図2 「『生徒指導』選択者の自由記述」における共起ネットワーク

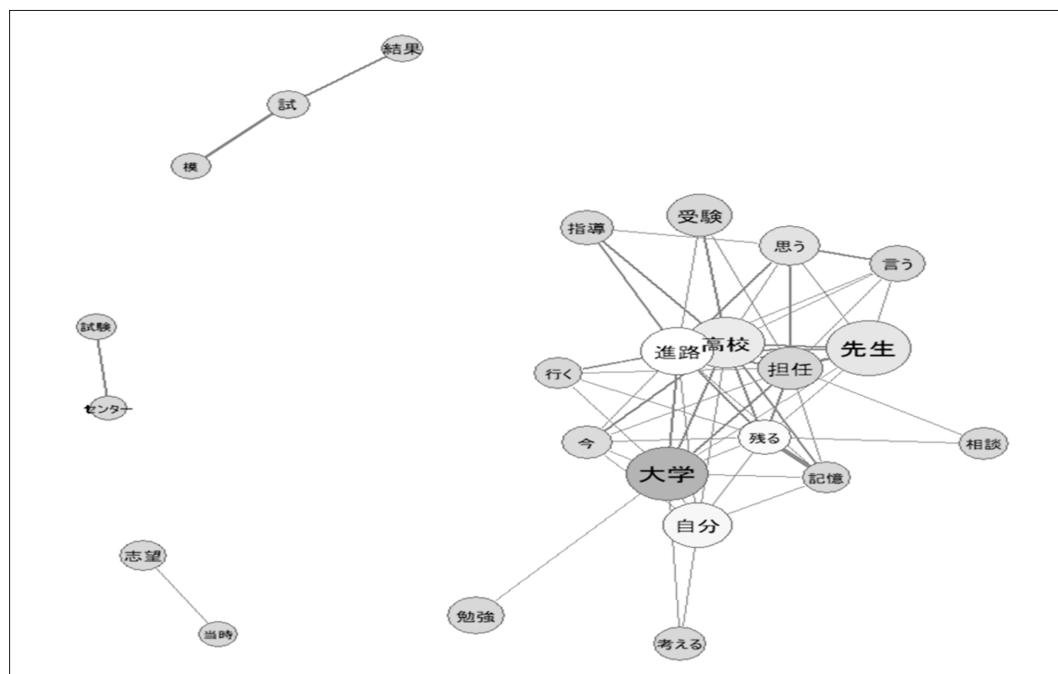


図3 「『進路指導』選択者の自由記述」における共起ネットワーク

いるという特徴もみられる。「キャリア教育」では、図の右側に独立して、(自分)を中心にして、(職場)、(体験)などが共起する語として出現している。

次に、事例についての自由記述における選択領域別の共起ネットワークである図2、図3をみていく。特定の選択領域ごとに関連の詳細をみることができる。なお、事例の自由記述は一人平均約404文字からなる文章であった。また、「キャリア教育」に関しては事例数の少なさが原因で描画不可能であることより、それ以外の「生徒指導」、「進路指導」の二領域で分析することにした。図2では、図中の(指導)を中心にして、(先生)、(生徒)の関連や、(学年)、(主任)、(集会)の関連を(注意)が介在している。(担任)、(クラス)、(友情)にもつながっている。また、独立したものとして、(制服)、(スカート)、(厳しい)であったり(呼び出す)、(知る)、(怒る)であったり、(生活)、(あいさつ)のように生徒指導の個別の内容と関わる語がその周りに出現している。図3では、図中の(進路)、(担任)、(先生)、(高校)、(大学)、(受験)などの多岐にわたる語が、(担任)を中心に複雑にかつ強固に結びついている。周りには、独立して、(当時)、(志望)であったり、(センター)、(試験)であったり、(模)、(試)、(結果)のように進路指導の個別の内容と関わる語が出現している。

（４）テキストマイニングによる分析結果の考察

図1のタイトル記述による分析では、学生全員の語と語の共起の全体像が俯瞰できるという特長がある。全員の事例の自由記述からの分析を先に試みたが、全体的にあまりにも煩雑になりすぎてつながり具合がぼやけてしまったことより、全体の分析についてはより鮮明に示すことができるタイトル記述による分析を行うことにした。また、記憶に残った事例について記述し、その内容に即してタイトルをつけるという行為は、学生のオリジナリティが存分に発揮される場所である。たとえ同じ内容の事例を書いたとしても、タイトルが同じであるとは限らない。むしろ異なるほうが自然である。それは事例をどのように振り返りどう考えたのか、またどこに重点が置かれているのか、つまり、自分にとってどのように位置付けたのかということについての気持ちが鮮明に現れるからである。そういう意味で、記憶に残った事例の自由記述からそれぞれ感じ取ったエッセンスがタイトルに表れていると考えてよい。全員を対象とした共起の特徴として、「生徒指導」群と「進路指導」群を、「(先生), (親身), (考える)」群が介在している点については、生徒指導や進路指導の複雑で困難な問題に対して教師がひたむきに対応している姿がそこに表れている。ただ、図中の(生徒指導)周辺の語と語のつながりをみてみると、マイナスイメージの語がつながりとしてみてとれる。これは、生徒指導について、その指導の仕方に(厳しい), (嫌)と感じるところが多いように受け止められる。「教育」そのものの中に、教育される者(学習者)が教育する者(教師)に対して従属的な立場に追いやられるという目に見えない関係構造が組み込まれている。丸山(2002)は、この状態を「教育のコロニアリズム」としているが、ここでは目に見える形で、コロニアリズムな状態が形成されていることをうかがわせる。また、図中の(進路指導)では、その周辺をみると、(大学), (受験)が大きな円で描かれていることがわかる。これは、「進路指導」が一番直近である大学受験についての関わりが自分の中で大きな出来事であったと考えられる。これについては、受験以外の「進路指導」という教育活動の観点があまり印象に残っていなかったものとして受け止められる。「キャリア教育」については、図中の(職場), (体験)が太い線で結ばれている。前述のとおり、事例のすべてが職場体験についての内容であった。少ない事例かつ同じ案件の内容ということで、生徒指導や進路指導に比較して認知の点で劣っている。キャリア教育を行う際に、その目的や内容が示されていないかもしれないという点で、キャリア教育を推進していく上ではこの部分の改善がのぞまれよう。

図2, 図3からは、特定の領域における語と語の共起のつながりを詳しくみることができ。図2の「生徒指導」の自由記述では、中央付近の大きな群の中に出現する人物に着目すると、(自分), (生徒), それに(先生)が近接して共起している。それに対して、図

3の「進路指導」の自由記述でも同様にみても、(自分)、(担任)だけである。(担任)の横に(先生)という語が出現しているが、これは、線が直接つながっていることより「担任の先生」といった言い回しがあったことを示している。ここで示された二者関係と三者関係の共起は、表1の集計結果の裏付けにもなっている。次に、図2では、図中に、「(自分)、(思う)」群が成立している。一方、図3では、「(自分)、(考える)」群がみてとれる。この違いは特筆すべき視点になるだろう。図2の生徒指導の方は、(思う)に留まり、図3の進路指導の方は、(考える)にまで及んでいる。つまり、自己の内省という観点からすると、すべてとは言えないまでも一般的には、(思う)より(考える)の方がより自己やそれにまつわる出来事に対して深い内省が促されていると考えられる。そういう意味では、生徒指導の出来事においても、自分事として人生を捉えるために(考える)という記述がもっと表出することがのぞまれるのかもしれない。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、学校を取り巻く環境が変化している中で、学校現場で行われている広義の生徒指導について、実際に行われている指導における特徴を教員養成課程に所属する大学生に対して想起に基づく調査を実施し、その現状と内在する課題を明らかにすること。その上で、「広義の生徒指導」のあり方について考察することであった。

その特徴として、①学級担任としての役割の重要性、②「生徒指導」に対するマイナスイメージ、③「進路指導」の中心は大学受験、④「キャリア教育」に対する子どもたちの認知不足、⑤「生徒指導」の三者関係、「進路指導」の二者関係という傾向、⑥先生が親身になって考えてくれた「生徒指導」と「進路指導」、⑦「生徒指導」では(思う)のに対して、「進路指導」では(考える)という内省の深さの違い、ということが明らかになった。①は全体としての特徴で、②～④は特定領域の個別の特徴、そして、⑤～⑦は、生徒指導と進路指導の関係に関わる特徴といえる。ただ、本研究では、教員養成に限定された学生の想起による分析であることや一番記憶に残っていること一つを選択して記述していることより、他にも記憶に残る多くの事象があると考えられること、また、初等中等教育段階でそれぞれの学生が経験した事例の詳細まで正確に覚えているかどうか分からないことなどから考えると、本分析を通じて初等中等教育段階の広義の生徒指導についての特徴や現状の一般化を示したとはいえないかもしれない。とはいえ、広義の生徒指導の一側面を観察したことにはなるであろうし、将来教員になろうとして教育実習まで終えた学生の自己の初等中等教育段階での広義の生徒指導を振り返った記述分析は、教師の指導内容の連鎖という観点で意義あることである。つまり、教員養成課程に所属する将来教師を目指す学

生にとっては、自分が経験したことを基盤にして、教師になるために必要な資質や能力を高め、学習によって積み重ねてきたことを分析し統合した上で自身の中で評価していくことが求められる。その上で、自己の目指す教師像を確立していく必要がある。その際、初等中等教育段階での土台となる経験や教師からの記憶に残っている指導は将来自分が教師になってから児童生徒を指導する時にある一定の影響を受けたものになるのではないだろうか。さらに、自分が指導した児童生徒がもし教師を目指していくなれば、そのときの指導が新たに生まれる教師の指導に影響を与えることになるのではないか。そうした広義の生徒指導における教師の指導内容の連鎖の構造解明に資する研究という意味においてその意義は認められよう。

そもそも、「指導」とは何であったのか。林(2016)は、「指導とはある目的に向かって教え導くこと」であるとしている。つまり、子どもたちと向き合った上で指をさし示して目的に導くことである。その際、その主体は言うまでもなく児童生徒である。また、その前提として、子どもたちとの信頼関係が構築されていることがのぞまれる。したがって、上から下への命令系統が示す関係ではないということである。特に、生徒指導において、学生が自分事として「考える」ことができるような生き方に関わる指導ができていくのかということに対して、本来の指導の形態を前者のように位置づけて考えていけば、生き方に関わる指導は行う必要のある重要な指導になるが、もし、上下関係が成り立つ、上から下への一方的な形態を指導だと考えていたならば、その指導はできないことになる。というよりむしろしてはいけないことになる。つまり、教師自身が経験したことや、そこから形成された考え方などが唯一正しいものだとする「マイセオリー」の押し付けにすぎないからである。したがって、子どもたちが、「自分」で「考える」という生徒指導の実践がのぞまれよう。

また、教育界の知の発展により、便宜上、「生徒指導」、「進路指導」、「キャリア教育」の三つを分類して名前をつけコーディングしているが、子どもたちが関わり、対峙する問題は様々な形で表れ、領域の一つ一つが分断された状態で扱うことができる問題ばかりではない。むしろこの三つが複合的に重なり合っているような問題に対応していかなければならない場面もたくさん存在する。そう考えると、教師側の構えとして、領域それぞれの機能を個別ではなく統合的に捉え直して考える必要が生じる。教科活動や教科外活動すべてにおいて、それぞれの三つの領域が教育機能として関わるのがのぞまれているが、学校を取り巻く環境の変化を考慮するとその機能どうしの関わりを促進が喫緊の課題としてのぞまれるのではないか。

それらを元にして今後の課題について考えてみると、一つ目は、教師と児童生徒間に生

じる上から下への「押し付け」に代表されるような「教育の暴力性」ともいえる問題である。小玉(2010)は、「教育する者－教育される者という関係が成立する教育的関係について、支配者－被支配者、援助者－非援助者といった二項対立図式を組みかえ、異質なものの間に葛藤を含んだ関係を追究しようとするポストコロニアルの視点は、教育関係を批判的に組みかえていくうえでも重要な手がかりを提供する」と指摘している。つまり、そういった関係性を意識した上で、それを乗り越えていく方法の検討が求められる。また、二つ目は、「生徒指導」、「進路指導」、「キャリア教育」の機能どうしの関わりや統合について、それを行うに当たっての方法を、総合的かつ具体的に検討することが求められる。そのためにも、教育される側からのアプローチに加えて、教育する側の教師に対する調査からのアプローチも重要になる。

引用文献

- 林 尚示 (2016) 「第1章 生徒指導の意義と原理」 林 尚示・伊藤秀樹 (編) 『生徒指導・進路指導 理論と方法』 学文社 pp.1-17
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版 pp.155-158
- 小玉重夫 (2010) 「教育思想史におけるポストコロニアルの視点」 『近代教育フォーラム』 Suppl (0) pp.153-161
- Lewin, K. (1951) : *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. D. Cartwright (Ed) NY: Harper and Brothers. (猪股佐登留 訳 『社会科学における場の理論』 誠信書房 (1956))
- 丸山恭司 (2002) 「教育という悲劇, 教育における他者－教育のコロニアリズムを超えて－」 『近代教育フォーラム』 11 (0) pp.1-12
- 文部科学省 (2010) 『生徒指導提要』 pp.1-3
- 文部科学省 (2011) 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
- 文部省 (1961) 『進路指導の手引き－中学校学級担任編』
- 小川 勤 (2009) 「教員養成課程におけるキャリア指導力向上を目指した学生参加型授業法「マイクロ・ティーチング」の展開」 『日本教育情報学会 年会論文集』 (25) pp.356-357
- 都筑 学 (1999) 『大学生の時間的展望－構造モデルの心理学的検討－』 中央大学出版部 1999 pp.34-36

初等中等教育における「広義の生徒指導」の現状と課題（胡田裕教）

山崎保寿（2007）「高等学校におけるキャリア・カウンセリングの導入とその課題－キャリア・カウンセリング事例に関する調査結果を踏まえて－」『日本高校教育学会年報』第14号 pp.16-23